

〈翻訳〉

メランヒトン『学習の規則について』（1531年） （De ordine discendi. 1531） 翻訳

菱刈 晃夫

今回は『神学要覧』の翻訳シリーズを一時休止し、メランヒトンの演説の試訳を掲載する。

メランヒトンによって大学カリキュラムのなかに積極的な教育価値をもつものとして位置づけられたのが、演説（*declamatio*）であった。メランヒトンは数多くの演説原稿を執筆した。当時の習慣によって、それらはしばしば機会あるごとに他者によっても披露された⁽¹⁾。アリストテレスの『弁論術』によれば演説は、審議的（助言的）なもの、法廷用のもの、演説的（演示的）なもの三種類に分けられるが⁽²⁾、メランヒトンによる演説や序文のほとんどは演説的なもの—演説的弁論もしくは講演—である⁽³⁾。その目的は、現在におけるある事柄の称賛もしくは非難にあり、聴衆を知性的にも感情的にも説得し、彼らを価値ある行動や振舞いといった実践へと鼓舞すること、すなわち教育もしくは教導にある。ゆえに、彼は修辞学と弁論術に基づく演説を重視したのである。ここでは専門科目や専門家を支える基礎として、さまざまな学芸を踏まえることの必要性和重要性が説かれている。学習には常に規則、あるいは順序や秩序（*ordo*）が必要とされる。ラテン語によるテキストはCR11, 209-214によった。

* * *

カスパー・クルーツィガーによる学習の規則に関する演説。1531年に修士学位取得の際に行われたもの。

この場所からしばしば哲学全般について、さらにこうしたすべての学芸の価値について語られる場合、これらは学校で教えられてきているものですが、それはわれわれが善く幸福に生きるために必要であると判断されているからです。わたしは生まれつき凡庸で、そのため、より高等の学問を称賛するのを疎かにしてきましたが、これらはその明白な有用性のゆえに、すべての者に推奨されるべきだと思われます。しかし、この学問の種類については、いわば僅かしか語られていません。このことをわれわれは公言し、これによって若い人々がより偉大な学芸を理解すべく準備されるようになります。確かに、これらの有用性について毎日あなた方に対して学校で教師たちは繰り返し語っているとはいえ、それでもここでこのことに関して何か語られなければなりません。こうしてわれわれは公の伝統に従うことになります。

わたしが公の名において演説を行うのですから、あなた方はそれに相応の権威を帰すことになるでしょう。若者諸君。あなた方は、皆さんの教師でありこの最上でもっとも学識ある人々の集まりにおいて、それがどれほどの価値をもつか評価することになるでしょう。彼らはわたしにこの役を負わせました。というのも、彼らのすべての思想はわたしの声によってあなた方に伝えられるからです。彼らはあなた方に最上の計画を望んでいて、あなた方がこの場所でこ

うした勉学を尊重するように駆り立てられるのを止めたりはしません。これはあなた方個人にとっても名誉となり有用であるだけでなく、国家の存続にとっても必要であると判断されます。しかし、もしだれかがこうした秩序の重要性を拒絶し、熟練するだけではなく国家全体に対して最上のものを望んでいる人々の判断を無視してしまったら、当然のことながら人間性〔人間らしさ・教養〕(humanitas)は失われてしまうことになるでしょう。

ところで、わたしはあなた方が、より下位にある学芸の勉学を蔑ろにしないよう駆り立てられるように考えています。これらは、たとえ世間の人々に見せるところが少なくとも、より上位の学芸を知るための道を舗装してくれますし、国家の業務を維持してくれます。したがって、学習の規則に関して僅かなものをわれわれは付け足したいと思います。これは、すべての物事において大抵当てはまることです。クセノフォンがもっとも甘美に語ったように、秩序ほど人々にとって有用で美しいものはない⁽⁴⁾。

ここから開始するとすれば、学芸のあいだにはある密接な繋がりがあることをあなた方は知ることになります。というわけで、たとえあるものが人生において卓越し突出しているように見えるにしても、それでも他者の助けは必要なのです。そういうわけで、野心や利益をえようとす期待に駆り立てられて、あのより高度な学芸へと急ぐ者は愚かに振舞うことになるのであり、これらによる成果は未経験な者の目にさえ見えるものとなり、残りの学問をまるで人生にとっては無用であるかのようにして、これらを無視し蔑ろにしてしまうのです。

さらに、わたしにはときどきこうした密接な繋がりが文字の要素そのものにおいても似たように存在するよう思われます。そこではたとえ声その価値を示すにしても、それにもかかわらず調和を欠いて話は生じてはこないからです。そこで文字からすべての学芸が生じてくる限りは、われわれはこうした要素のなかに、ちょうど種において、学芸の違いのなかで、ある跡に気づくことができるのです。自らに生命と精気をもつ声はすべてに勝っています。なぜなら、それは完璧な音を他者からの助けなしに発するからです。残りの文字は、まるで笛のように、これらに吹かれて音を受け取るのです。

したがって、声はすべての学芸のなかでもっとも優れたものを意味しますが、それは宗教の教えです。これは他の学芸よりも遙か上位に置かれていて、人生のすべての計画、仕事や勉学を統率しています。じつに市民的な規律(civilis disciplina)は宗教を抜きにしては保持されえません。また、法の知識は宗教の教えから非常に多くのものを採り入れています。それゆえに、ちょうど半母音〔半分しか声にならない声〕のように、たとえばある曖昧な声であるなら、その務めは声〔母音〕なしには果たされえません。そのようにして政治的規律においては宗教が市民的な慣習〔掟〕に対して声を付加するのであり、こうして自身の人間による法を權威によって保護し、必要ときには改善するのです。

無言の文字は、いわば私的な生活を意味します。これはまさに無言であり、宗教や市民的な習慣をなくしては粗野で野獣のままです。したがって、話は異なる文字から組み立てられるように、さまざまな学芸の種類や活動が人生においては必要なのです。

ところで、わたしはずっと以前からここにお集まりの学識ある方々が、こうした無分別を平

静な心で耐えているのでは、と恐れています。それでも、この演説は若者のためになされているのですから、善良な人々はこの催しに配慮してくれるだろうと希望もっています。このなかで、われわれは学芸の結び付きと段階とを描こうとしているのです。しかも、文字の要素そのもののなかに描いてあることは見えるのであり、その結果ずっと以前より、これは毎日目の前にあったように、しばしば学者たちの精神には到来していたのです。こうしたことを考えることで、われわれには確かに学芸の有用性についての判断が研ぎ澄まされ、形成されるように思われます。そこで、この大学で文法の教授（professor grammaticus）をしているわたしは喜んで、わたしが実践しているこの職業により演説を引き受けたのでした。

ところで、若い方々よ、もし子音が無視されてしまったらどのようなことになるか考えてみてください。会話のなかでただ母音だけを用いようとしたら。そうすれば疑いなく自然のすべての現実と戦うことになるでしょう。そういうわけで、文字は構成要素と呼ばれるのですが、それは自然のなかで必要なものなのです。ここから身体は構成されているのであり、したがって文字は会話を構成するのに必要なのです。そういうわけで、普遍的な事物における神的な系統は、ひとつの構成要素を取り除かれてしまうことで崩壊させられてしまいます。同じように子音が無くされてしまえば、はっきり発音された声は存立しえなくなってしまうのです。同じように、さまざまな文字は自然にそのあいだで密接に結び付いているのであり、さまざまな学芸もまたそのあいだで結び合わされたり、または解かれたりしているのです。しかし、より下位の学科が、その成果が未熟な者にとっては見えてこないという理由で、人生には無用だと感じる者は、この学芸の合唱を混乱させてしまうことでしょう。

もし、天や星の感嘆者であるなら（というのもこれらはこの身体よりもっと美しいと考えられるのですが）、水や事物を、星の明るさには及ばないとして自然から無くしてしまおうと欲するでしょうか。こうした者がいるとすれば、それは狂人だと言えるでしょう。もし、宗教の教えを称賛するがゆえに生活からすべての法や市民的な掟〔慣習〕、すべての家政上の鎖〔束縛〕を無くしてしまえと命じるなら、これをすべての正気の人々は、力と武器とによって抑え込むべきだと判断しないことがあるでしょうか。

さらに、近頃では自らの誤りによって懲罰を及ぼすような類の、正気を失った狂気の見解によって神学を实践するような者どもをわれわれは見かけます。たとえば、あなた方はミュンツァーや再洗礼派、そして他にもこうした種類の怪物を想い起すことでしょう。次のように彼らを狂人と判断しなさい。彼らは諸学芸の合唱と調和を崩壊させ、下位の学芸を無視し蔑ろにするのですから。というわけで、文字の構成要素に関してすべての個々の文字体系は、言葉による議論にとって必要であると考えなさい。同じく学校で教えられているすべての学問学科は、人生にとって必要であると見なしなさい。

なぜなら、学芸に関して正しい感覚をもつ者だけがこの段階に注意を向けたときに、それぞれ個々の学芸が、確かな有用性をもつがゆえに作り出されていることを理解するからです。

こうしたことをわたしは若い人々に思い出させるように話をしましたが、その多くは自分自身に対してだけではなく、国家に対しても害を及ぼしているように見受けられます。それは時

機をえずしてより高度の学科へと急ぐからです。なぜなら、あなた方の勉学はあなた方だけではなく、国家にも関係してくるからです。

さらに、あなた方はあなた方の勉学の目的を覚えておかななくてはなりません。それは国家に対して助言を与えたり、教会に教えを与えたり、宗教の教えを保持したりするためにあることを覚えておいてください。これは完全な教えなくしては示すことができません。しかし、完全な教えには〔それを支える〕より下位の学科なしにはだれも達することはありません。

こうした考えによって精神が形成されるとき、次に学習の規則についての熟考が必要になります。わたしはこの場所で秩序のもつ力が一般にどれほどのものであるかを語ろうとは思っていません。それは事実かつ既知であり、ここで説明されうるよりもより広く知られていることです。もし、農夫が初めに種を蒔こうとし後で耕そうとするなら、あるいは盛夏の下で種まきをしようとし冬の寒さのなかで耕そうとするなら、そうした労力は無駄になってしまうでしょう。同じように学問学科を理解するにおいて正しい規則〔順序〕(iustus ordo) が保たれないなら、成功は全くの見込めないことになってしまうでしょう。

適当な時に与えられることがなければ、善は悪をもたらすと言われています⁽⁵⁾。それゆえに、最善で最高の事柄についての勉学でさえ、もしそれが適切な時期に受け取られることがないなら、害となってしまうのです。そういうわけで、われわれの祖先は学習の規則を構成したように、いわば等級〔クラス〕のような確かな段階を考案したのです。この規則によって若者は、より下位の学芸からより高位の学芸へと向かわされたのです。今ではそうした制約が粉碎されてしまったかのようであり、無秩序に事柄が処理されています。すると、まるでキノコのように突然われわれの前に神学者、法律家や医者が、文法も知らず、弁証法も知らず、学習計画もなしに自然哲学や道徳哲学という揺りかごなしに (sine incunabilis Philosophiae naturalis ac moralis) 現われ出てくる、という事態となります。こうしたことを知るのは、ただそれらが非常に上品な〔教育的な〕ものであるからというだけではなく、判断力の訓練となり、より高次の事柄を受け入れる準備となるがゆえに、より高次の学科へと入れられることが許可される前に、かつては共通にすべての者に教えられていたからなのです。さて、少なくとも今はこうしたもっとも重要な学科には大きな〔解放された奴隷がかぶった〕フェルト帽を贈り、人間に関するすべての学問学科には明白な軽蔑が示されていることを明らかにすれば十分です。

もし、法律家や当局がこうした無謀を抑えなければ、すぐに国家において教養 (literae) は無となってしまう、物事に関するどのような教えもなくなってしまう。なぜなら、そこに突然〔キノコのように生え出て〕現れた神学者、法律家や医者は、何ら自由な学問〔自由学芸〕を携えてはおらず、単に他の諸学芸が消滅するのを放置しておくだけではなく、自身の職業〔専門〕をも保持することができないからです。このような教養を保護するという配慮は、まさに当局の問題であるのです。それゆえに、こうした学芸は神にも似たものと聖霊によって呼ばれているのであり、こうして地上における神からの贈り物、宗教、市民的な態度や、すべての品位ある学芸が保護され保持されることになるのです。神的な事柄に対してこのように配慮するがゆえに、彼らは荘厳な称号を携えているのであり、これ以上に大きく尊ぶべき飾りは当局にはないのです。

それゆえに、学習の秩序が崩壊しないように注目しておくことは当局にとって相応しいのであり、さもなければ品位ある学問学科は減茶苦茶にされてしまいます。プラトンは『国家』のなかで「およそどのような場合にも、国家社会のもっとも重要な習わしや法にまで影響を与えることなしには、音楽・文芸の諸様式を変え動かすことはできない」⁽⁶⁾と述べています。これは無駄に言われているわけではありません。しかし、このことはより真実です。勉学が変わることで国家は変わるのです。ところで、国家のあらゆる変化は当局の配慮と関係しています。そして、歪んだ学習規則は最高かつ最善の事柄を崩壊へと引き入れてしまいます。したがって、とくにこうした事柄について当局は警戒しておかなければなりません。わたしはいつか将来こうした事柄については新しい法が制定されて、そのとき優勢であった国家の混乱や動乱は沈静化されるだろうと信じています。願わくば、容易かつ柔軟な崩壊が神の恩恵によって彼らに降りかかりますように。

それでも当分われわれは権力、熱意と勤勉によって達しうる限り、若者が規則に則って学習するように骨折ることにしましょう。

しかし、この大部分はじつのところあなた方にかかっているのです。なぜなら、われわれは熱心にこのことに関することをあなた方に勧めているからであり、すべての学問学科における最善の講義を提供しているからです。最高の信仰によって、語る規則を含んだ学芸が伝えられます。哲学と数学の基礎がもっとも明快に提供されるのです。どのような学校でプリニウスの第2巻が、ここで説明されているほどに明確に説明されているでしょうか⁽⁷⁾。したがって、あなた方自身にはこれらを等閑にするのを欲することなく、今の有利な点を利用するということが残されているというわけです。

確かに、知ることそのものの甘美さだけではなく、その有用性にもあなた方を引き入れていかなければならないように、あなた方自身もそうするようになるように。なぜなら、信じられないほどの快樂を雄弁はもたらしてくれるからです。過去の功績の歴史は驚くほど人間を喜ばせてくれるものです。歴史それ自体は語りの実例を提供してくれるので、これによって教育されることになります。そして、哲学においてわれわれに伝えられているところの事柄を精神によって考察することほど甘美なことはありません。天や地の身体の大きさについて、天体のさまざまな運動について、どれほど天の光がそれらのなかでさまざまに混合された調合されるかについて、それがこうしたより下位にある自然に異なる影響を及ぼすかについて、ちょうどある時とまたある時に混合された声異なる歌を作り出すように〔こうした事柄について考察することはこのうえなく甘美なことです〕。自然本性の内に神によって記されている市民の義務の原因を、学識ある人々によって注目されてきた驚くべき知恵を見ることも、われわれを喜ばせてくれます。

すでに、これらの勉学からもたらされる有用性については最大限に理解されたことでしよう。というのも、ギリシア人が言うように、より高次の学芸に至る中途〔道程〕⁽⁸⁾にこれらはあるからです。これらは確かに語りの知識〔弁証法・修辞学〕を必要とします。なぜなら、もし話の種類を判断できないのなら、何がだれかを前進させるのでしょうか。そして、多くの事柄が至るところで自然哲学や道徳哲学から採り入れられていますが、その源泉を見ない者は、

ときどき不恰好にくだらないことをしゃべることになります。

さらに、国家にとっては善き学芸を保持することは重要であるがゆえに、このことがあなた方の国家からすべての者に要請されていること考えるべきです。こうして尽力することで、あなた方がこれを放棄してこれを無くしてしまわないように。さて、より大きな恩恵をわれわれはすべて、私的なだれかとか、両親とか、友人とかから受け取るよりも、むしろ国家から受け取っているのですから、反対に今度は国家に対して感謝を返し、われわれの骨折りによって諸学芸を保ち守ることが当然です。

というわけで若者諸君、わたしはあなた方に、より高位の学問学科へと進むよりも、その前にまず哲学の基礎が認識されるように、そう決心するように勧めたいと思います。そして、このなかで熱意と労力が費やされるように。

始まりは全体の半ば⁽⁹⁾、と言われます。よきスタートを切った者は、[もうすでに] 半分の成果をあげているのです⁽¹⁰⁾。したがって、他の学科においても正しく始める者はより容易にすべてのものを成就するのであり、この人々はその学芸の知識を他の者にももたらすのです。これを欠いてそれらは理解されことも、考察されることも、把握されることもできません。

わたしのことを考えて、公の権威によってこの演説がもたれたことをだれかが軽蔑するとすれば、その者は、神がこの軽蔑の復讐者となるであろうということを知るでしょう。国家はわれわれの熱意を、特典と栄誉によって飾ったのです。今ではこれをわれわれは若者たちに喜んで授けます。なぜなら今はそうした議論の混迷のなかで、こうした哲学の一般的な勉学に従事するといったことは、並外れた称賛に値するからです。以上。

注

- (1) Cf. Philip Melancthon : *Orations on Philosophy and Education*. ed. by Kusakawa Sachiko. trans. by Christine F. Salazar. Cambridge 1999. p.xiii.
- (2) アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳、岩波文庫、1992年、45頁、参照。
- (3) Cf. Melancthon, *op.cit.*, p. xxx.
- (4) 「整理整頓ほど有用で美しいものはない」(クセノフォン『オイコノミコス一家政について』越前谷悦子訳、リーベル出版、2010年、71頁)。
- (5) エラスムス『格言集』IV. iii. 2.
- (6) プラトン『国家(上)』藤沢令夫訳、岩波文庫、2009年、304-305頁。
- (7) 1531年までにプリニウスの『自然誌』第2巻はヴィッテンベルク大学の地球中心の宇宙誌と天文学の基本教科書となっている。Kusakawa Sachiko : *The Transformation of Natural Philosophy. The Case of Philip Melancthon*. Cambridge 1995. pp.136f.
- (8) 『アリストテレス全集4』岩波書店、1968年、84頁。『天体論』292b9より。
- (9) エラスムス『格言集』I.ii.29.
- (10) ホラティウス『書簡集』I.2.40.